

『ラサリーリヨ・デ・トルメスの生涯』に〈概略〉はあったか？ ——ロサ・ナバーロ・ドゥランの作品解釈を検証する——

竹村文彦

はじめに

『ラサリーリヨ・デ・トルメスの生涯』 *La vida de Lazarillo de Tormes, y de sus fortunas y adversidades* (1554)¹⁾ (以下『ラサリーリヨ』と略記) は、ピカレスク小説の先駆けであり、西欧近代小説の成立過程においても重要な位置を占める²⁾。この作品の作者については、ヒエロニムス会士のフライ・ファン・デ・オルテガ fray Juan de Ortega、歴史家で詩人のディエゴ・ウルタド・デ・メンドーサ Diego Hurtado de Mendoza、劇作家のロペ・デ・ルエダ Lope de Rueda をはじめ、いろいろな候補者の名前は挙げられるものの、異論の余地のない決定的な説はいまだに現れていないというのが現状である³⁾。この「スペイン文学史上最も堅固に守られた秘密」(Carrasco 2003: 14) に挑んだ研究のなかで、近年最も大きな話題を呼んだのは、バルセロナ大学教授のロサ・ナバーロ・ドゥラン Rosa Navarro Durán の発表した一連の著作だろう⁴⁾。彼女はエラスムス主義者のアルフォンソ・デ・バルデス Alfonso de Valdés (1490–1532) を『ラサリーリヨ』の作者と断定し、バルデス作と銘打ってこの作品の版本を刊行してもいる (Valdés 2006)⁵⁾。マス・メディアの取材にも積極的に応じ、自説の正当性を訴える彼女は、有力紙《エル・ムンド》のインタビューで自信満々にこう語る。「私は絶対的な確信を持っているのですが、アルフォンソ・デ・バルデスが作者であることを証明するために私が提供する証拠の総体に対して反論を行うのは不可能です」(Azancot 2003)。現代スペイン作家の重鎮ファン・ゴイティソーロは、学界が斬新な主張に拒絶反応を起こし、黙殺を決め込むのを痛烈に批判したうえで、ナバーロの仮説を手放しで称賛する——「著者は博識をみごとに駆使し、文学上の源泉を比較し、当時の歴史的な脈を分析し、推理を働かせるが、その推理があらゆる創造的な企てに必要な想像力を排除することはない。しかる後に達する結論は、われわれの公式的な学術文化の樹木から疑いなく多くの枯葉をふるい落とししたことだろう」(Goytisolo 2003: 1)。実のところ、学界の側は決して黙殺を決め込んでいたわけではなく、この記事ののちにナバーロの論考への批判的な論評は相次ぐことになる。

アルフレド・バラス・エスコラーは、「自身の議論を一貫した形につなぎ合わせようと試みるさいに著者〔ナバーロ〕が発揮した勇気と才知」に敬意を表し、「こんなにも難所

の多い道をあえて切り拓こうというのは、今日それほど普通のことではない」のを認める。確かにナバーロが独自の視点から『ラサリーリヨ』を読み解き、これまで誰も考えたことのなかった作品論を築き上げたのは間違いない。膨大な研究の蓄積がある古典的な作品をめぐる、これほど目新しい説が提起されるのは稀有なことだろう。しかし深刻な問題は、「テキストがこうした仮説のどれにも根拠を与えていない」(Baras Escolá 2003: 16) 点であり、仔細に観察すると、ナバーロの主張には随所にほころびが見つかるように思われる。

ナバーロのバルデス作者説は、参考文献に掲げた2004年刊の著作(初版は2003年)、2010年の著作、2011年の著作の三冊のなかで主に展開されている。最初の本では、バルデスが影響を受けたと思われる先行作品と『ラサリーリヨ』の類似点がとくに詳細に検討され、最後の本では、『ラサリーリヨ』以外にも二つの作品の作者の問題が論じられる。このように重点の置き方に違いはあるものの、バルデス作者説に関するナバーロの主張はこの三冊を通じて一貫しており、それは次の六つの論点にまとめられる。(1)『ラサリーリヨ』の序文にはテキストの欠落がある。(2)語り手のラサロが書簡を宛てている相手「あなた様」*Vuestra Merced*は男性ではなく、女性である。(3)この作品は、1529年末から1532年9月の間に執筆された(この年の10月にバルデスは死去する)。(4)この作品はバルデスの『メルクリウスとカロンの対話』*Diálogo de Mercurio y Carón* (1529)と同じく、名無しの人物が次々に登場しては姿を消す形式で書かれている。(5)フェルナンド・デ・ロハス *Fernando de Rojas* の『ラ・セレスティーナ』*La Celestina* (1499)など、バルデスが読んで影響を受けたと思われる先行作品と『ラサリーリヨ』との間には多くの類似点がある。(6)バルデスの代表作である二つの『対話』および書簡と『ラサリーリヨ』との間にも類似点がある。これら六点のうち、ナバーロの奇抜な発想が最もよく現れているのは最初の二点であり、ここが彼女の仮説全体の「中核」(Goytisolo 2003: 3)をなす。そこで本稿では、他の研究者たちの論評を踏まえつつ、この二点に的を絞ってナバーロの主張の是非を検証する。この二点では、作者特定の問題は後景に退いているため、われわれはこの問題には深く立ち入らず、彼女の仮説をむしろ『ラサリーリヨ』の作品分析として扱うことにする。

I 序文のテキストに欠落はあるか？

I.1 ナバーロの仮説のまとめ

初めに『ラサリーリヨ』の設定を確認しておこう。この作品は、トレド在住の触れ役人ラサロ・デ・トルメスが、「あなた様」に宛てて綴った書簡という体裁を取っている⁶⁾。「あなた様」が「例の件」“*el caso*”についての報告を求めてきたのに応じたのだ。「例の件」とは、最終章で話題になるラサロとラサロの妻、そしてサン・サルバドール教区の

主席司祭の三角関係を指すというのが、1970年のフランシスコ・リコの指摘以来、研究者の間で広く認められた説である (Rico 1982: 21-25)⁷⁾。

書簡形式は作品の序文から始まっていて、序文もラサロ自身が語っているというのが従来の常識的な取り方であるが、ナバーロによれば、この序文は大きく二つの部分に分かれ、それぞれに別の語り手がいるという。序文ではどんなことが語られているのか？語り手の「私」はまず、世にも珍しい事柄が「多くの人」「muchos」に知られるのはよいことだと述べる。「というのも、そうした事柄を読まれた方が面白いところを見つけられたり、それほど深くは読まない方でも愉快的気分になったりすることはあるでしょうから」「[...] pues podría ser que alguno que las lea halle algo que le agrade, y a los que no ahondaren tanto los deleite.» (《Lázaro de Tormes》2011: 3)。次いで、「いかに劣悪な本でも、どこか取り柄はあるものだ」「no hay libro, por malo que sea, que no tenga alguna cosa buena.」というプリニウスの言葉を引いて、自分の本の存在意義を訴える。ましてや、人々の好みは千差万別なのだ。さらに、作家たちが苦勞を顧みずに作品を書くのは、金銭的な報酬を望むからではなく、「人々に作品を見たり読んだりしてもらい、もしそれに値するところがあるなら褒めてもらうことで報われたい」「y quieren [...] ser recompensados [...] con que vean y lean sus obras, y si hay de qué, se las alaben.」からだと言う。ここで引用されるのが、「名誉心が技芸を育む」「La honra cría las artes.」というキケロの寸言である。称賛されたいというのが万人に共通する願望であることは、身分の異なる三人の人物を通じて例証される。すなわち、命を危険にさらして敵陣に一番乗りする兵士、説教がうまいと言われて内心悪い気がしない聖職者、馬上槍試合でのぶざまな戦いぶりをお世辞で褒められ、褒めた道化に胴着を与えた騎士の三人である。読む人を楽しませ、感心されたいという気持ちはまた、語り手のものでもある。

Y todo va de esta manera; que confesando yo no ser más santo que mis vecinos, de esta nonada que en este grosero estilo escribo no me pesará que hayan parte y se huelguen con ello todos los que en ella algún gusto hallaren, y vean que vive un hombre con tantas fortunas, peligros y adversidades. (《Lázaro de Tormes》2011: 5)

(万事がこんな調子なのです。打ち明けた話、私とて人さまよりも聖人君子というわけではありませんので、粗雑な文体で綴りましたこのつまらない読み物でも、どこか好ましいと思ったださるすべての方が関心を寄せ、喜んでくださるならば、そしてこんなにも不運や危険や逆境にみまわれながら生きる者もいるのだということがご覧いただけるならば、悪い気はしないでしょ)。

以上をまとめると、語り手は自分が作品を公にすることの釈明をし、作品が「多くの人」に面白く読まれ、評価されることを期待している。「多くの人」や「すべての方」と

いう言い回しから明らかなように、ここには多数の読者への意識がある。こうした内容は、ラサロが「あなた様」に宛てて書いている手紙にはそぐわない、とナバーロは言う。「ラサロが読者に向かって、「粗雑な文体で綴りましたこのつまらない読み物」について語り、それを面白く、あるいは愉快地読んでほしいと願うのは理屈に合わない。なぜなら、「つまらない読み物」とは自分の人生の物語を「あなた様」に向けて語ったものなのだから」(Navarro Durán 2004: 17)。ナバーロの見方では、ここまでの部分の語り手は、ラサロではなく『ラサリーリヨ』の作者なのだ。学識豊かな作家であればこそ、古典作家のプリニウスやキケロを自在に引用したり、自分の「粗雑な文体」を意識したりもできるのだ(Navarro Durán 2010: 17)。ラサロが語り手の役を引き受けるのは、上の引用のすぐ後に続く、序文の最後の段落からということになる。

Suplico a Vuestra Merced reciba el pobre servicio de mano de quien lo hiciera más rico si su poder y deseo se conformaran. Y pues Vuestra Merced escribe se le escriba y relate el caso muy por extenso, pareciome no tomalle por el medio, sino del principio, porque se tenga entera noticia de mi persona; (《Lázaro de Tormes》2011: 5)

(あなた様にお願ひいたします。もしも技量と願望が釣り合っていたならば、もっと立派なもののできたであろう者の手になる、ささやかな奉仕の印をどうかお受け取りください。そして、例の件について一文を草し、詳細にわたって物語るようあなた様を書いて寄こされましたので、中途半端なところからではなく、最初からお話をし、私という人間を一から十まで知っていただく方がよいように思われました)。

なるほど、この部分は「あなた様」に向けて語られており、語り手がラサロであることに疑問の余地はない。ナバーロは結論的に次のように言う。「結局、『ラサリーリヨ』の序文では、二つの相異なる言説がつなぎ合わされている。作家が読者に宛てた序文と、物語の「筆者」たるラサロの言説である。前者は読者に向けて、自分が披露する作品について語り、後者は話し相手というべき「あなた様」に向けて、自分の人生を物語る」(Navarro Durán 2004: 17-18)⁸⁾。

では、これほど性質の異なる二つの言説が同じひとつの序文を構成しているのはなぜなのか？最後の段落とそれに先立つ部分との間に、「何か欠けているのは明白である。恐らくは一枚の紙葉が、オリジナルの手稿ないし初版(私はこちらだと思う)から意図的に抜き去られたのだ」(Navarro Durán 2004: 20)。紙葉が抜き取られたため、切れ目を示していた部分が失われ、本来別々の文書であったものがひとつに合体してしまったというわけだ。アルフォンソ・デ・バルデスには、やはり高名な人文主義者の弟がいたが、その弟フアン Juan の著した『言語をめぐる対話』*Diálogo de la lengua* (1534年頃執筆)でも、手稿の序文の部分から二枚の紙葉が抜かれるという事件は起きているという。『ラサ

リーリヨ』の作者が手本にしたはずの文学作品、『ラ・セレスティーナ』、ホセ・ルイス・カネット・バリエース José Luis Canet Vallés の『テーバイの喜劇』 *La comedia Thebayda* (1521)、フランシスコ・デリカード Francisco Delicado の『アンダルシア女口サーナの肖像』 *El retrato de la Lozana andaluza* (1528) などには、最初の方のページに必ず〈概略〉 *argumento* が付いていて、作品の内容を簡単に紹介している。『ラサリーリヨ』の序文から欠落した紙葉にも、恐らくこうした〈概略〉があり、そこに「テキストを正確に読むうえでわれわれに欠けている本質的な情報」が示されていたはずだ。「あなた様」に関する情報が明らかになれば、ラサロの身の上話は「完全に反体制的な作品へと変わる」(Navarro Durán 2004: 23) はずだと、ナバーロは推測する。

I.2 ナバーロの仮説の検証

ナバーロの仮説の当否はひとまず措くとして、取りあえず言えるのは、この仮説が『ラサリーリヨ』の大きな独創性を否定してしまっていることだ。この作品が世に出た当時のスペインの文学状況を振り返ると、物語文学のジャンルといえば、ガルシ・ロドリゲス・デ・モンタルボ Garcí Rodríguez de Montalvo の『アマデイス・デ・ガウラ』 *Amadís de Gaula* (1508) を筆頭とする騎士道物語と、ディエゴ・デ・サン・ペドロ Diego de San Pedro の『愛の牢獄』 *Cárcel de amor* (1492) に代表される感情小説とにほぼ限られ、『ラサリーリヨ』の出版と相前後して牧人小説やビザンチン小説がようやく出始めたところであった (Rico 1988: 153)。これらのジャンルの作品で主要な役を演ずる人物はいずれも、戦闘や冒険に明け暮れる騎士、恋愛に憂き身をやつす貴族や牧人など、「確かなところ、街角を曲がったところを出くわすのが期待できる類の人ではなかった」(Rico 1988: 153–154)。実在感を欠いた登場人物に対応して、彼らの身に起こる挿話も、やはり現実離れた空想的な要素に満ちていた⁹⁾。『ラサリーリヨ』の「絶対的な新しさ」(Rico 1988: 154) は、けちん坊の盲人や一文無しの郷土など市井の人を物語空間に招き入れ、卑近な日常を現実にもそくして描いたところにあった¹⁰⁾。従来の物語に反旗を翻し、現実的な物語を創出するのが作者の狙いであったとするなら、ラサロの書簡は明らかな虚構であるより実話の体裁を取る方がはるかに都合がよかったはずだ。すなわち、トレドに住む実在の触れ役人が実際に書いた書簡という体裁である¹¹⁾。そのために不可欠なのは、作者がどこにも顔を出さず、序文の語りまで物語本体の語り手ラサロに委ねることであった。これは「作品を十全に理解するためにまことに重要な意味をもつ、並はずれた発明である」と、アルベルト・ブレクアは述べる。「こうして、自伝体の虚構が序文にまで延長されるとき、序文と物語とは相互に依存する壊し難い統一体として提示され、作者は芸術上の本当らしさの理論を極限にまで進めることが可能になる」(Blecua 1982: 25)。しかるにナバーロの想定するような、作者の手になる序文や〈概略〉は、書簡の書き手とは別人格の作者の存在を明かし、こうした仕掛けを台無しにしてしまう。フランシスコ・マルケス・

ビリャヌエバも、このような観点からナバーロの説を批判する。「〔ナバーロの理論では〕徹底的な侵犯をこととする作品の性質や、最初の瞬間から大胆に規範を踏みつけ、厚くましくも踏みこむ点が考慮に入られていない」（Márquez Villanueva 2004: 1）。

それでは、序文の最終段落とそれに先立つ部分（便宜上、前半部分と呼ぼう）との間に、ナバーロの言うような大きな差異が認められるかどうかを検討してみよう。まず最初に指摘すべきは、前半部分が読者に向けて語られているというのは正しくないことだ。なぜなら、アントニオ・アラトーレが言うように、確かに語り手は読者に「言及しているが、彼らに語りかけてはいない」（Alatorre 2004: 144）からだ。『ドン・キホーテ』前篇（1605）の序文冒頭でセルバンテスが「暇な読者よ」と呼びかけるのとは異なり、自分の書いたものを「どこか好ましいと思ってくださるすべての方」は、単に言及されているに過ぎない。序文が差し向けられている相手は、前半部分では誰とも明示されておらず、それが初めて明示されるのは、最後の段落に入り、「あなた様」が出てきたときだ。ならば、そこに先立つ前半部分も、潜在的に「あなた様」に向けて語られていたと捉えるのが最も自然である。ナバーロの考えるような、語りかけられる相手の交代（前半部分の読者から最終段落の「あなた様」へ）は実際には起きていない。次に、ナバーロによれば、自分の作品が多く読者に評価されることを願うのは作者であり、「あなた様」に宛てて手紙を書いているラサロが他の読者を意識するのは「理屈に合わない」ということになるが、バレンティン・ベレス・ベンサラーも指摘するように、ラサロが語っている最終段落にも実は読者への言及はある（Pérez Vénzala 2004: 4）。

[...] y también porque consideren los que heredaron nobles estados cuán poco se les debe, pues Fortuna fue con ellos parcial, y cuánto más hicieron los que, siéndoles contraria, con fuerza y maña remando salieron a buen puerto. (《Lázaro de Tormes》2011: 5)

（それに、高貴な身分を受け継いだ方々に考えていただきたいのは、そうした方々は運命の女神に味方されたのですから、いかにご自分の力量に負うところが少ないか、そして運命の女神にそっぽを向かれながらも、努力と才覚で漕ぎ続けて安全な港へたどり着いた者が、どれほどのことを成し遂げたか、ということです）。

ラサロは、自分の書簡が「高貴な身分を受け継いだ方々」に読まれ、自分がどれほどの困難を克服してきたか知られることを望んでいる。かくして一般読者への意識、そして自作が広く読まれることへの期待は、序文の前半部分にも最終段落にも一貫して見られるのだ。序文の二つの部分を結びつける要素はもうひとつある。これもベレス・ベンサラーの指摘であるが、最終段落の初めの方で言及される「ささやかな奉仕の印」“el pobre servicio”は、単独では何を指しているのか分かりにくい（本稿 54 ページの引用を参照）。直前の段落、つまり前半部分に属する段落に「このつまらない読み物」“esta nonada”と

あり、それを言い換えているのが分かるからラサロの書簡そのものを指示しているのが了解されるのだ。だから、二つの段落はつながっていなければ具合が悪いことになる (Pérez Vénzala 2004: 4)。

「あなた様」ひとりに宛てて書簡を書いているラサロが、同時に一般読者を意識しているのはなぜなのか？ 当時は書簡を活字にして出版することが大流行していた。「伝言書簡 *cartas mensajeras*」(というふうには呼ばれていた)を読み、執筆し、印刷に付すことが1550年前後の年代の普遍的な情熱であった。ピエトロ・アレティーノ *Pietro Aretino* が1537年に個人的な通信を刊行することを思いついて以来、各国語で書かれた何十何百という書簡が同時代の他の多くの人の体験やゴシップ、私的な些事をふんだんに広めた。そうした人々は、多かれ少なかれ著名であったり、多かれ少なかれ無名であったりした。流行は大変な猛威をふるい、十分な教育を受けていない者までが流行に乗ろうという誘惑を感じたほどだった (Rico 1988: 155)。こうした流行を裏づける顕著な例としては、エンリケ四世の年代記作家エルナンド・デル・プルガール *Hernando del Pulgar* の『書簡集』*Letras* (1485?) が約20年ぶりに再刊されたこと (1543年と1545年)、アントニオ・デ・ゲバーラ *Antonio de Guevara* の『親しい人への手紙』*Epístolas familiares* が1539年に出版されて、二年後に版を重ねたことなどが挙げられる。書簡出版の隆盛に応じて、ファン・デ・イシアール *Juan de Yciar* の『伝言書簡を書く新たな流儀』*Nuevo estilo de escribir cartas mensajeras* (1547)、ガスパール・デ・テヘーダ *Gaspar de Texeda* の『伝言書簡の教本続篇』*Segundo libro de cartas mensajeras* (1552) など、手紙の書き方を指南する本も数多く出回るようになったという (Rico 1988: 84-85)。流行にのっとり、ラサロも当初から出版を見越して書簡を書いている。このような設定を想定すれば、ひとりの受信者に宛てつつ同時に多くの読者を意識するという二重構造の謎は解けるだろう。ガルシア・デ・ラ・コンチャも、次のように述べる。「ルネサンスは書簡というジャンルの大きな発展をもたらした。(……) そうした手紙の大多数は、あるひとりの人物に宛てられているにしても、数多くの受信者、つまり公表を念頭に置いて書かれている」 (García de la Concha 1981: 49)。

ここまでの議論を簡単にまとめよう。ナバーロによれば、『ラサリーリョ』の序文においては、作者が読者に向けて語った本来の序文 (前半部分) と、語り手ラサロが「あなた様」に向けて語った文章 (最終段落) とが合体してしまっている。しかし実際には、前半部分に読者への呼びかけはなく、ここも潜在的に「あなた様」に向けて語られていると考えられる。その一方で、多くの読者に感心されたいという願望は、前半部分、最終段落を問わず一貫してあり、結局、この二つの部分はひとつながりの文章と取ることができる。確かに、教養がないはずのラサロがプリニウスやキケロを引用するなど、作者が顔を覗かせたのではないかと思われる不自然な箇所も見受けられる。当時の常識では、序文は作者が虚構を交えずに書くものであった。この常識の束縛はあまりに強固で、さ

すがの『ラサリーリヨ』の作者も、序文までも虚構化し、作中人物に語らせるという斬新きわまる企てを完全には達成できず、作中人物に声を委ね切れなかったのではないか。

II 「あなた様」は女性か？

II.1 ナバー口の仮説のまとめ

「あなた様」がどんな人物なのかは、作中では不明である。最終章の第七章に至ってサン・サルバドール教区の主席司祭が登場したとき、司祭は「私のご主人であり、あなた様の召使いでご友人」“mi señor, y servidor y amigo de Vuestra Merced” (《Lázaro de Tormes》2011: 77) と紹介され、主席司祭の知り合いであることが判明する。「例の件」についての報告をラサロに求める立場にあり、ラサロからは一貫して「あなた様^{フエストラ・メルセー}」と敬称で呼ばれる人物。とすると、高位の聖職者か、もしくは司法関係者か——いずれにしても、この人物は男性だというのが従来の漠然とした了解であったように思われる。対してナバー口は、「あなた様」は女性であると主張する。彼女の主張は、次の一節の解釈を唯一の根拠にしている。サン・サルバドールの主席司祭とラサロの妻の深い仲が噂になっていたある日、主席司祭はラサロの妻もいる席で、くだらない中傷に耳を貸してはならない、自分の利益だけを考えろとラサロに忠告する。それに対してラサロはこう答える。

—— Señor — le dije — yo determiné de arrimarme a los buenos. Verdad es que algunos de mis amigos me han dicho algo de eso y aun por más de tres veces me han certificado que antes que conmigo casase había parido tres veces, hablando con reverencia de Vuestra Merced, porque está ella delante. (《Lázaro de Tormes》2011: 79)

(「旦那様」と私は言いました、「私は立派な方におすがりすることに心を決めています。なるほど、私の友人の何人かはそんなふうなことを申しましたし、家内が私と結婚する前に三べんも子供を産んだなどと三回以上も請け合いさえました。こんな言い方をして、あなた様にはお許しを願います。家内が目の前におりますので)。

ナバー口が問題にするのは、“hablando con reverencia de Vuestra Merced...” (こんな言い方をして、あなた様にはお許しを願います) 以下の部分である。引用した文章は、ラサロが主席司祭に向けて直接話法で語っている発言である。だからこの「あなた様」はむしろ主席司祭であり、続く人称代名詞の ella (英語の she に相当) はラサロの妻を指すというのが、「ほぼ五百年の間、出版界の人間や批評家たちの伝統が迷うことなく採択してきた解釈」(Carrasco 2003: 16) であった。この場にいる女性はラサロの妻だけだからだ。対してナバー口は、この箇所は論理的につじつまが合わないと言う。ここでラサロが「あなた様」に許しを請うのは、parir (子供を産む) というのが不躰な言葉で、女性に

対しては失礼だからだ。そこで、この「あなた様」は「主席司祭と話すために使われた敬称ではあり得ない。なぜなら、ラサロが主席司祭に詫げるのは理屈に合わないからだ。主席司祭は男性であり、《parir》という語が彼に対して失礼に当たることはあり得ない」(Navarro Durán 2010: 28)。さらに、続く「家内が目の前におりますので」という言い添えもおかしいと指摘する。ラサロは無礼な言葉遣いを「あなた様」に詫げているのだから、ここにかかわるのは彼の妻ではなく、「あなた様」自身の存在であるはずだからだ。「代名詞の《ella》がラサロの妻を指しているとするのも（前に述べられているように、実際彼女はその場にいる）、やはり理屈に合わないだろう。というのも、自分の言ったことについてある人に許しを請うのに、別の人が目の前にいるからというのは理由にならないからだ」(Navarro Durán 2010: 28)。

こうした論理の矛盾は、テキスト自体に問題があるために生じているとナバーロは推測する。彼女によれば、“hablando con reverencia de Vuestra Merced...”以下の部分は、ラサロが主席司祭に直接語った談話の一部ではなく、語りの地の文に属するのだ。事実、この研究者の見解をもとに作られた版本では、この一節は改行された上で（ ）でくくられ、

(Hablando con reverencia de Vuestra Merced, porque está ella delante.)

というふうに別の段落を構成している(Valdés 2006: 258)。すると必然的にここの「あなた様」は、ラサロが書簡を宛てている正体不明の人物ということになる。続く ella が受けているのも、同じ人物と取ることができる。ラサロは手紙を書いている相手に向かって、「こんな言い方をして、あなた様にはお許しを願います。あなた様は目の前にいらっしゃるのよ」と言っているわけだ。parir という言葉を口にした無礼を詫げているからには、「あなた様」は女性でなければつじつまが合わない。同じことは、Vuestra Merced (あなた様)を受けている代名詞が、女性を表す ella であることからとも言える。ella で受けているのは Merced が女性名詞だからだとも考えられるところだが、ナバーロが裏づけとして引くラファエル・ラペサによれば、ここでは名詞の性は関係なく、人物としての「あなた様」が男性の場合には男性を表す代名詞の él で、女性の場合には ella で受けられるのだという(Lapesa 2000: 333)。ラサロから離れた場所で書簡を読む人が「目の前にいらっしゃる」とされるのは、「逆説的だが、目の前にいないからだ。もしそうでないなら、わざわざそんなことを言う意味がないだろう。そしてもし目の前にいないのに、ラサロが目の前にいると言うのであれば、それは情報が相手の手に届いたとき、そうした状況が生じるのに気づいているからだ」(Navarro Durán 2010: 29)。ラサロの声が書簡を通じて「あなた様」に届くとき、二人は一緒にいるようなものだというのだ。

「あなた様」と呼ばれる女性が、ラサロとその妻とサン・サルバドール教区の主席司祭

の間の三角関係に関心を寄せ、情報を求めるのはなぜなのか？ 見ず知らずの触れ役人ラサロとその妻の事情に彼女が興味を抱くはずはない、とナバーロは述べる。彼女が知りたいのは、面識のある主席司祭の行状であり、司祭が情婦を隠し持つようなふしだらな人間かどうかである (Navarro Durán 2010: 31)。主席司祭は、「あなた様の召使いでご友人」と紹介されていた。ならば、この二人の関係は「告解を介したつながりしかあり得ない。このつながりが、これら二つの概念、奉仕と友情という概念に合致するものだ」 (Navarro Durán 2010: 32)。主席司祭は「あなた様」の聴罪師であったのだ。もし司祭が不品行な人で、ラサロの妻を情婦にしていたらどんなことになるか？ 彼は告解で聞き出した「あなた様」の罪を早晚ラサロの妻に漏らすだろう。ラサロの妻は妻で、最も身近なところにいる夫にそれを伝えるだろう。かくして「あなた様」の秘密の罪は、トレドの触れ役人の知るところとなる。そして触れ役人の職務といえまさに、市中で「司直のお仕置きを受ける方々 [= 義のために迫害される人々] につき従い、その罪状を大声で言い立てること」 “acompañar los que padecen persecuciones por justicia y declarar a voces sus delitos” (《Lázaro de Tormes》2011: 77) なのだ。このような仔細があるのなら、「あなた様」が強い危惧の念を抱き、三角関係の真相を知りたいと望むのも当然である。ナバーロはこうした仕掛けに、「作品の天才的な構成」 (Navarro Durán 2010: 33) を見る¹²⁾。

「あなた様」は女性であり、サン・サルバドル教区の主祭司祭を聴罪師としている——しかしこうした事情は、氷山の一角のような形でテキストの細部にわずかに顔を覗かせているに過ぎず、その全貌は「推論に推論を重ねて初めて」明るみに出る。「どんな作家もこんな形で物語を暗号化し、自分の言いたいことをこれほど懸命に隠しはしないだろう」 (Navarro Durán 2010: 35)。そこでナバーロの持ち出すのが、本稿の前節 (I) で取り上げた「序文のテキストには欠落がある」という仮説である。「あなた様」の性別や主席司祭との関係といった重要な情報は、失われた〈概略〉に明記されていたはずだというのだ。「その〈概略〉に間違いなく出てきたはずのキーワードは「聴罪師」や「告解」という禁句であり、禁句があったためにテキストのこの本質的な部分は検閲官の手で、もしくは恐らくスペインでこの作品を新たに印刷したいと望んだ何者かの手で削除されるに至ったのだろう」 (Navarro Durán 2010: 35)¹³⁾。

エラスムスやアルフォンソ・デ・バルデスもまた、倫理観を欠いた聴罪師が告解の秘密を平気で漏らすことを憂慮していた、とナバーロは指摘する。そして、エラスムスの『対話集』 *Colloquia* (1518) やバルデスの『メルクリオとカロンの対話』から数箇所を引用してこのことを裏づけるが、ここでは後の作品の登場人物、ポリュドロス王の語るところを引くに留めよう。「何より君は清廉潔白で純粋な聴罪師を選ぶべきだ。墮落を知らず、品行方正で評判もよく、野心家ではない、そんな人を。悪徳に染まった聴罪師を相手に告解をする人々もいて、彼らはそういう聴罪師の方が告解を聴くのが上手だし、罪もよく知っていると言うが、そんな言い分に耳を貸してはいけない。私を信じてくれ。

そういった聴罪師が告解を聴くのは、恥じらいもなくそれを言いふらすためなのだ」(Navarro Durán 2004: 38)。『ラサリーリヨ』の作者とバルデスは、同じ問題意識を共有していたのだ。作者の特定とは何の関係もないように思われた長い議論のすえ、この二人を同一人物と見なす根拠のひとつがようやくここに示された。

II.2 ナバー口の仮説の検証

“hablando con reverencia de Vuestra Merced...” 以下の一節に関するナバー口の解釈をめぐっては、自身でも『ラサリーリヨ』の校訂本 (*La vida de Lazarillo de Tormes* 1997) を出版しているフェリックス・カラスコが、論文一本を費やして反論を展開している (Carrasco 2003)。カラスコ論文はナバー口の解釈の問題点を的確に指摘しているように思われるので、以下ではその主な論点を紹介する。第一に、先に述べた通り、この一節はラサロが主席司祭に語った発言の一部と伝統的に捉えられてきたのだが、それを切り離して独立した段落を設けること自体に正当性はあるか否かである。カラスコは十六世紀に出版された各種版本に立ち返り、区切りを示すコンマやピリオドが“hablando...”の前に打たれているかどうかを確認する。その結果、1595年刊のプランティン版には「最小限の区切りの記号」たるコンマがあったものの、1554年に出た四種の版、翌年のシモン版、1573年のベラスコ版、1587年のミラノ版のいずれにもコンマやピリオドは見出されなかった¹⁴⁾。そこから、「区切りの目印が何もないところにピリオドを打ち、改行をするためには、ここに誤植があることを適切な理由をもって証明する必要がある」(Carrasco 2003: 17) という結論が導かれる。第二に、本来区切りのないところで文を切り離す「外科手術」が万が一許されたにしても、そのような操作を経てできた新たな文は文の体をなしていない、という指摘である。なるほど、この一節の前半部分、“hablando ... Vuestra Merced”は現在分詞の形成する副詞句、後半の“porque...”以下は理由を示す従属節であり、主節がどこにも見当たらない。「文として不完全な断片」をもって独立した段落を構成するのは難しい。第三に、ナバー口によれば、“..., porque está ella delante”のellaは書簡を読むはずの「あなた様」を指し、ラサロはこの人物に対して不躰な言葉を詫びているのだが、カラスコが言うには、「“delante”(目の前で)という副詞は、明示的ないし暗示的な語を伴うのでなければ、会話が交わされている空間しか指すことができ」ず、「何キロも離れた場所で手紙を読む人のことを「目の前にいる」と言うのは、この作品にもこの時代にも他に例がない」(Carrasco 2003: 17)。第四に、当時のスペインにおいて、「el / ella」という呼び方は、卑しい社会的出自の見知らぬ人に対してもっぱら使われ、収集された用例の大多数も宿屋の旅人たちの間で交わされたものだ」(Carrasco 2003: 17)¹⁵⁾。書簡の受取人は主席司祭に仕えられる立場にあり、身分の高い人物であるのは間違いない。ラサロも彼／彼女のことを一貫して「あなた様」と呼んで敬意を表している。そうした人物をellaの呼称で呼んだとしたら、昔から誰もが認めるこの作品の文体の「品格」が

損なわれてしまう、とカラスコは訴える。以上のような検討を踏まえ、彼がナバーロの仮説に下す評価は辛辣である——「最も卓越した文献学者たちに支持された読みをめぐり、形成された合意の伝統というものがある。その伝統から理由もなく断絶していることを別にしても、この新たな読みは文法適合性の原理を侵し、さらに十六世紀のスペイン語の発話システムにおける社会言語学的な規律、解釈学の規則、われわれの小説にとって本質的な意味を持つ文学上の「品格」の規則、そして読者の常識をことごとく侵犯している」(Carrasco 2003: 17)。

それでは、他の研究者たちは問題の一節をどのように解釈しているのだろうか？ ナバーロが指摘するような矛盾は、架空のものなのだろうか？ ペレス・ベンサラは、「私はあなたに繊細な言い方で申し上げます。彼女——私の妻——が目の前におりますので”le hablo con delicadeza porque está ella — mi mujer — delante”という解釈を示したうえで、さらにこれを敷衍して、「私はあなたに、友人たちが私に語ったようにはっきりとは申し上げませんが、妻と一緒におりますので、という意味だ」と言う(Pérez Vénzala 2004: 10)。だがラサロは、友人の言葉を引用する形ではあれ、「私と結婚する前に三べんも子供を産んだ」と露骨に言い放っており、これが「繊細な言い方」だとはとても思えない。この作品を初めて邦訳した会田由は、ここを「もっとも^{かかあ}嬢めがちょうどここにおりますので、こんなことをあなたさまへ申しあげるのですがね」(『ラサリリーヨ・デ・トルメスの生涯』1990: 112)と訳す。ラサロは目の前の妻に遠慮しているわけではなく、当事者三人が一堂に会したこの場をむしろ好機と捉え、不倫の真相を確かめようとしているようだ。主席司祭に詫げる意味合いは抜け落ちているが、これも可能な解釈ではあろう。一方、自身の校訂本の注釈でリコは、この箇所が「きわめて難しい問題をはらんでいる」のを認めたとうえで、こう述べる。「恐らくこんなふうに理解すべきなのだろう、ラサロは主席司祭(「あなた様」)に対し、それ[parir という動詞]を使ったことを謝るが、そうした謝罪の第二の理由は自分の妻が同席していることだ、と。すなわち、まず司祭に謝り、次いでなぜ謝るべきなのかを明確にするのだ”Quizá debe entenderse, pues, que Lázaro se excusa ante el Arcipreste (《Vuestra Merced》) por utilizarlo, pero que la segunda razón de tal disculpa es que su mujer está presente: primero se excusa ante él y luego le precisa por qué tiene que excusarse” (《Lázaro de Tormes》2011: 79)。この分かりにくい説明に「納得できずにいる」のはリコ自身であり、彼は「謝罪が彼[主席司祭]に向けられているのに、謝罪する理由は彼女[ラサロの妻]に発する」という事態に頭を悩ませる。これがまさにナバーロの指摘する矛盾である。リコはさらに、ella がラサロの妻ではなく「あなた様」(ここでは主席司祭)を受けている可能性や誤植の可能性にも言及する(《Lázaro de Tormes》2011: 294-295)。アラトーレは、この一節に「文法的に複雑なところは少しもない」と言い切る。「ラサロは、とても丁寧に主席司祭に“許しを請うて”いる。なぜなら、罪を負わされた当人、つまり自分の妻がそこにいるのに、parir というまことに粗暴で恥知らずな動

詞を口にしたからだ” “Lázaro, muy cortésmente, le ‘pide perdón’ al Arcipreste por haber soltado el verbo *parir*, tan crudo, tan descarado, estando allí presente la incriminada, o sea su mujer” (Alatorre 2004: 145)。『ラサリーリヨ』を新たに日本語に訳した牛島信明も、アラトーレとほぼ同様の取り方をしている——「家内の前でこんなはしたないことを話すのは、もちろん司祭様の御免こうむってのことですが」（『ピカレスク小説名作選』1997: 102）。

このアラトーレの解釈が、最も明快かつ妥当であるように私には思える。ある人に働いた無礼はその当人を辱めるだけでなく、そこに居合わせた人の響感を買い、不快感を抱かせずにおかないだろう。ならば、妻に失礼なことを言ったのを主席司祭に対して詫びるのは、決して不自然な行いではない。ナバーロの訴える矛盾は、実は矛盾ではなかったのだ。さらに言えば、かりにラサロの妻が同席していなかったにしても、主席司祭に向けられたラサロの発言は謝罪に値するほど不躰である。まず、この席で話題になっているのは主席司祭とラサロの妻が深い仲だという噂である。そうした文脈のなかで、司祭に向かって、妻が結婚前に「三べんも子供を産んだ」と言うのは、「あなたは三回も妻を妊娠させた」と放言するにも等しいだろう¹⁶⁾。また、*parir* という動詞が無作法なのは、聞く人が女性の場合だけに限らないと私は考える。この点に関して、上に挙げた研究者の何人かは十六世紀の礼儀作法書、ルカス・グラシアン・ダンティスコ Lucas Gracián Dantisco の『スペインのガラテオ』 *Galateo español* (1593)¹⁷⁾ から一節を引く。そこには、「とりわけ話を聞く人の中に女性がいる場合には」 “especialmente si en el auditorio huviesse mugeres” (Ruffinatto (2000: 246) より引用) 下賤な言葉を慎むように、と記されている。「とりわけ」という断りがあるからには、下賤な言葉は男性の前でも無作法なのは変わりなく、避けられるべきなのだ。「主席司祭は男性であり、《*parir*》という語が彼に対して失礼に当たることはあり得ない」というナバーロの説明は、当を得ているとは言えない。ラサロは主席司祭本人への無礼な言葉と、司祭の面前で妻を傷つけたこととを同時に主席司祭に向かって詫びているが、詫びの理由は後の点だけを言語化したというのが実情であろう。

かりにナバーロの説く通り、「あなた様」は女性であると仮定してみよう。この女性はサン・サルバドル教区の主席司祭の行状に関心を抱き、ラサロに三角関係の真相を尋ねる手紙を出す。主席司祭は彼女の「召使いでご友人」である……。これだけの情報から、主席司祭が彼女の聴罪師だとただちに判断できるだろうか？ 二人の関係は他にもいろいろに考えられ、たとえばの話、彼女が主席司祭のまた別の愛人であった場合にも、司祭の素行には無関心でいらなかったはずだ。

ナバーロは、失われた〈概略〉のなかに作品を読み解く鍵となる情報が明記されていたはずだと推測する。そもそも〈概略〉なるものには、どんなことが記されているのだろうか？ 『ラ・セレスティーナ』の〈概略〉は、カリスト、メリベア、セレスティーナといった主要登場人物を紹介しながら、簡単な粗筋を15行ほどの文章で綴っている (Rojas 2001: 223-

224)。アルフォンソ・デ・バルデスの代表作のひとつ『ローマで起きたことをめぐる対話』 *Diálogo de las cosas acaecidas en Roma* (1529) の〈概略〉全文は、以下の通りである。

皇帝の宮廷に仕える騎士でラタンシオという名の若者が、バリアドリードの広場でひとりの助祭長に出くわした。助祭長は兵士の身なりをし、ローマから来ている。二人はサン・フランシスコ修道院に入ると、ローマで起きたことについて会話を交わす。第一部では、これらの出来事に関して皇帝にはいかに何の責任もないかがラタンシオによって助祭長に示され、第二部ではキリスト教世界の幸福のため神がいかにすべてを許容したかが示される (Valdés 2012: 81)。

ここで「ローマで起きたこと」とは、神聖ローマ皇帝カール五世 (スペイン国王としてはカルロス一世。バルデスは彼のラテン語秘書を務めていた) の軍勢が1527年にローマを略奪したことを指すが、それはともかく、どちらの〈概略〉も作品の内容のごく手短な要約に終始しており、作中に見出せないような新たな情報は何ひとつ盛られていない。これから作品を読む読者のために、作品のあらましを伝えるのが〈概略〉の役目であり、その中身が簡潔な内容紹介を出ることはまずない¹⁸⁾。したがって、もし『ラサリーリョ』に〈概略〉が付されていたとしても、作品中に全く語られていない重要な情報をそこに期待するのは難しい。さらに、かりに〈概略〉のなかに「あなた様」は女性であり、主席司祭を聴罪師としている、そこで彼をめぐる良からぬうわさの真相を知りたがっている、といったことが明記されていたとしても、そのことによってなぜ『ラサリーリョ』が「完全に反体制的な作品へと変わる」のか。ナバーロは納得のゆく説明を与えていない (Ramírez López 2006: 28)。

結び

本稿では、『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』の作者をアルフォンソ・デ・バルデスと断定するロサ・ナバーロ・ドゥランの研究を取り上げ、中核をなす二つの仮説の是非を検証した。ナバーロの最初の仮説によれば、『ラサリーリョ』の序文には抜き去られた紙葉があり、そのため種類の異なる二つの文書が合体してしまっている。そのひとつは、作者が読者に向けて自分の作品について語った本来の序文 (前半部分) であり、もうひとつは語り手ラサロが「あなた様」に向けて語った部分 (最終段落) である。しかし実際には、前半部分に読者への呼びかけはなく、単に言及されているだけで、ここも潜在的に「あなた様」に向けて語られていると見なせる。その一方で、多くの読者の評価を得たいという願望は、前半部分のみならず最終段落にも見て取れる。よって、序文の二つの部分の間には、ナバーロの指摘するような大きな差異はなく、ひとつながりの文章

と捉えるべきである。序文までも作中人物に語らせて虚構化したことが、『ラサリーリヨ』の画期的な新しさだと考えられる。ナバーロの仮説は、こうした新しさを否定してしまう点でも問題である。

ナバーロのもうひとつの仮説によれば、ラサロが書簡を宛てている「あなた様」は女性であり、サン・サルバドル教区の主席司祭を聴罪師としている。そこで、自分の告白した罪がラサロの妻を通じて触れ役人のラサロに漏れるのを危惧し、主席司祭とラサロの妻が本当に深い仲なのかどうかの報告をラサロに求めたのだ。こうした事情は、失われた紙葉にあった〈概略〉に明記されていたはずである。エラスムス主義者のバルデスも告解という制度を批判していたので、『ラサリーリヨ』の作者となる資格を持ち合わせているとナバーロは結論づける。以上のナバーロの議論は、作品の終わり近くに出てくる“hablando con reverencia de Vuestra Merced, porque está ella delante”という一節の解釈を出発点としている。彼女はこの一節は意味が通らないとし、ラサロが主席司祭に語った会話文からこれを切り離し、地の文に編入する。だが、フェリックス・カラスコも示す通り、十六世紀に出版された版本で“hablando …”の前に区切りの記号(コンマやピリオド)が打たれているものはほとんどなく、この「外科手術」は正当化され得ない。また、地の文に編入された一節が主節を欠いた非文法的な文であること、離れた場所で書簡を読む人について“está delante”(目の前にいる)とは言えないことなども問題である。ナバーロの言うような操作をしなくても、この一節には矛盾のない解釈を与えることができる。

ナバーロは、自分の仮説が「推論に推論を重ねて初めて」出てきたものであることを認めていた。『「ラサリーリヨ・デ・トルメス」の一件の真相』という彼女の研究書(Navarro Durán 2010)の表題が、現代スペイン作家エドゥアルド・メンドーサ Eduardo Mendoza の有名な推理小説(1975年)の題をパロディー化しているのは興味深い。ナバーロの典型的な論の進め方はこんなふうだ。序文は二つの異なる文書がつながったものかも知れない、そうした合体は紙葉の欠落によって生じたのかも知れない、その紙葉には〈概略〉があったかも知れない、その〈概略〉には「あなた様」は女性だといった情報が記されていたかも知れない……。単なる推論に過ぎないものが、いつの間にか確実な事実とされて次の論証の根拠に使われる。こうして築き上げられた仮説はいかにも脆く、推論のひとつに欠陥が見つただけで崩れ落ちてしまう。カラスコは、ナバーロの主張を「トランプで築いた城」“castillo de naipes”(Carrasco 2001: 15)にたとえる。スペイン文学で最も有名な古典のひとつに思いもよらない奇抜な解釈を提示した功績は認めつつ、私は次のベレス・ベンサラの見解に同意せざるを得ない——『ラサリーリヨ』に欠落した部分があると推測するのがかなり冒険的で、その欠落した部分が作品の〈概略〉だと考えるのがさらに冒険的だとするなら、明らかに向こう見ずで厳密性に乏しいのは、自分の想像力を唯一の頼りにしてその中身を捏造することだ」(Pérez Vénzala 2004: 6)。

註

* 本稿は、日本イスパニヤ学会第 59 回大会（2013 年 10 月 13 日、上智大学）における口頭発表の内容の一部を含んでいる（発表の表題は、『ラサリーリヨ・デ・トルメスの生涯』の作者特定をめぐる近年の研究動向）。引用の日本語訳はとくに断らない限りすべて拙訳であり、引用の原文は『ラサリーリヨ』に関しては網羅的に、それ以外については必要に応じて掲げた。〔 〕内は本稿執筆者による補足である。

- 1) この作品の現存する最古の版は 1554 年のもので、アルカラ・デ・エナーレス、アントウェルペン、ブルゴス、メディーナ・デル・カンポの四都市で刊行されている（このうちメディーナ・デル・カンポ版は、バダホス県のある建物の壁の中から 1992 年に偶然発見された。この版の特徴などについては、Cañas Murillo (1996) を参照）。ただし、1552 年ないし 1553 年に出版されながら、現在では失われた版があったものと推定されている。この失われた初版に関しては、Rico (1988: 113-151) を参照。フランシスコ・リコによれば、1554 年版の章分け、各章に付された題辞、そして作品の題名は出版社の意向を反映したものである。そこで、自身の三度目となる校訂本では、章分けや題辞を廃し、題名も単に *Lazarillo de Tormes* としている（《Lázaro de Tormes》2011）。本稿における『ラサリーリヨ』から引用は、このリコの校訂本によるが、章番号は従来の分け方に従って名指すことにする。
- 2) 西欧近代小説の成立過程における『ラサリーリヨ』の位置については、Rico (1988: 153-180) などを参照。
- 3) 『ラサリーリヨ』の作者特定をめぐる研究を概観した論考には、Rico (2011: 115-128)、Ramírez López (2006: 12-25) などがある。
- 4) ナバーロ以外の近年の注目すべき研究として、次の二人のものを挙げておく。ホセ・ルイス・マドリガルは、フランシスコ・セルバンテス・デ・サラサル Francisco Cervantes de Salazar の伝記的事実が作品の主人公ラサロのそれと重なることや文体の類似を根拠に、このトレド生まれの人文主義者が『ラサリーリヨ』の作者だと提唱する (Madrigal 2003)。また、メルセデス・アグリョー・イ・コボは、フアン・ロベス・デ・ベラスコ Juan López de Velasco（禁書となった本作品を検閲し、1573 年にその修正版を出版した）の財産目録のなかに、『ラサリーリヨ』と『プロパリアディア』〔劇作家バルトロメ・デ・トレス・ナアール Bartolomé de Torres Naharro の戯曲集〕を印刷に付すためになされた修正箇所紙束 “*Vn legajo de correcciones hechas para la ynpressión de Lazarillo y Propaladia.*” (Agulló y Cobo 2010: 37) という項目を発見。これに先立つ項目には、同じ箱に保管されていた文書として、歴史家で詩人のディエゴ・ウルタド・デ・メンドーサが書いた手稿や書簡が数多く見出されたため、この人物を『ラサリーリヨ』の作者と推測する。しかし、この証拠だけで作者を特定するのは、あまりに性急に過ぎるだろう (Rey Hazas 2011: 16)。
- 5) アルフォンソ・デ・バルデスを『ラサリーリヨ』と結びつけたのは、ナバーロが最初ではなく、ジョゼフ・V・リカピートも 1976 年の段階で、この人物が作者である可能性を示唆していた (Ricapito 1980: 44-51; Pérez Vénzala 2004: 14)。
- 6) ナバーロは、文盲のラサロが口頭で述べたものを公証人が書き取ったという説を唱える (Navarro Durán 2010: 33-34)。
- 7) ビクトル・ガルシア・デ・ラ・コンチャ (García de la Concha 1981: 15-46) やアントニオ・アラトーレ (Alatorre 2002) のように、この説に賛同しない研究者もいる。
- 8) ナバーロと同様、序文に種類の異なる複数の言説を見出した研究者に、リカピート (Ricapito 1980: 65)、ガルシア・デ・ラ・コンチャ (García de la Concha 1981: 73-74)、B. W. アイフ (Ife 1992: 47) などがある。
- 9) 騎士道物語の荒唐無稽ぶりについては、『ドン・キホーテ』前篇に登場する聖堂参事会員

が、次のような記述を非難していたのを思い起こそう。すなわち、「弱冠十六歳の若者が、まるで塔のような巨人と戦い、わずか一太刀浴びせただけで、相手をちょうど砂糖菓子か何かのようにまっぶたつにしたといった記述、あるいは、合戦の様子を描写する際、敵の軍勢百万余と言っておいて、物語の主人公がその軍勢に立ちむかうとなると、彼一騎で、そしてその腕の力だけで勝利を取めたとかいった記述」（セルバンテス 2006: 282）である。感情小説『愛の牢獄』の主人公、若い貴族のレリアーノは、全身毛だらけの騎士に引き立てられて牢獄に監禁され、そこで責め苛まれる。これが写実的な描写というより、抗しがたい愛の欲望にかられ、苦悶する男の姿を寓意的に表していることは容易に見て取れる。また、スペインのシエラ・モレーナにいたはずの「作者」*auctor* は、いつの間にかマケドニアに身を置いている（San Pedro 1995: 4-11）。

- 10) 『ラサリーリョ』に先行する『ラ・セレスティーナ』や『アンダルシア女ロサーナの肖像』などでも、売春宿に出入りする下層階級の人々の暮らしが活写されているのは確かだが、これらの作品は対話体で書かれている点で、『ラサリーリョ』のような物語文学とは別に考えるべきであろう。
- 11) この作品のために作者が書簡形式を選択したのも、この形式が本来「日常生活における通常の伝達手段」であり、フィクションよりも実話との折り合いがよかったからに違いない（Rico 1988: 155）。また、作者が実名を明かさなかったのも、作中に聖職者批判が色濃いという事情もさることながら、実話の体裁を保持する目的が大きかったと思われる。その意味で『ラサリーリョ』が作者不詳であるのは、偶然の産物では決してなく、むしろ本質的な「作品の構成要素」“*parte integrante de la obra*”（Ruffinatto 2003: 13）なのだ。こうした作者の意図を汲み、リコは自身の最新の校訂本（《Lázaro de Tormes》2011）で作者名を《Lázaro de Tormes》としている。
- 12) ナバーロによれば、サン・サルバドル教区の首席司祭は、バルデスの仇敵であったドミニコ会士フランシスコ・ガルシア・デ・ロアイサ Francisco García de Loaysa (1479-1546) と興味深い相似を示している。この人物はセビーリャの大司教、インディアス諮問会議の議長、異端審問長官など要職を歴任した大物で、1523年にはカルロス一世の聴罪師も務めたが、多くの女性との情交が噂されていた。バルデスはここに、国家機密漏洩の危険を見て取って、『ラサリーリョ』の三角関係に同様の構図を反映させたというのがナバーロの見立てである（Navarro Durán 2010: 62-67）。
- 13) ナバーロは、『ラサリーリョ』の初版がイタリアで出版された可能性を指摘している。
- 14) 私はメディーナ・デル・カンポ版（ファクシミリ版）で、この箇所にもコマもピリオドもないことを確認した（Lazarillo de Tormes 1996）。
- 15) 文法学者のゴンサロ・コレアス Gonzalo Correás も、『スペイン語ないしカスティーリャ語の大いなる術』*Arte grande de la lengua española castellana* (1626) のなかで、次のように述べている。él/ella は、「主人が召使いに対して話すときに適当であり、また *merzed* を使って話す習慣のない低俗な人や田舎者」が用いる（Lapesa (2000: 333) より引用）。
- 16) 事実、リコによれば、この一文は、“[mi mujer] había parido tres veces — hablando con reverencia — de Vuestra Merced” と別の形に区切って読むこともできる。すると、「失礼なことを申しますが、[妻は] あなた様の子供を三回産んだ(……)」という隠れた意味が浮かび上がる。
- 17) この本は、イタリアの文人ジョバンニ・デッラ・カーサ Giovanni Della Casa が著した『ガラテーオ』*Galateo* (1558) の翻案である。
- 18) この点、『アンダルシア女ロサーナの肖像』の〈概略〉は異色であり、第二の序文の様相を呈している。ここで作者は、作品の梗概にはほとんど触れず、誰もテキストに手を加えな

いよう要請している (Delicado 2000: 171–173)。

参考文献

- Agulló y Cobo, Mercedes, *A vueltas con el autor del Lazarillo*, Madrid, Calambur, 2010.
- Alatorre, Antonio, «Contra los denigradores de Lázaro de Tormes», *Nueva Revista de Filología Hispánica*, I: 2 (julio-diciembre 2002), pp. 427–455.
- , «El *Lazarillo* y Alfonso de Valdés», *Nueva Revista de Filología Hispánica*, LII: 1 (2004), pp. 143–151.
- Azancot, B., y Berasátegui, N., «Rosa Navarro Durán, “Alfonso de Valdés escribió el *Lazarillo*”», Entrevista publicada en El Cultural de *El Mundo*, 15 de Mayo de 2003. <http://www.elcultural.es/version_papel/LETRAS/7067/Rosa_Navarro_Duran/>
- Baras Escolá, Alfredo, «*Lazarillo* y su autor: ¿Alfonso de Valdés o Lope de Rueda?», *Ínsula*, 682 (octubre 2003), pp. 13–16.
- Blecuca, Alberto, «Introducción crítica» a su ed. de *La vida de Lazarillo de Tormes, y de sus fortunas y adversidades*, Madrid, Castalia, 1982, pp. 7–70.
- Cañas Murillo, Jesús, «Un *lazarillo* de Medina del Campo: peculiaridades y variantes de una edición desconocida de 1554», *Anuario de Estudios Filológicos*, XIX (1996), pp. 91–134.
- Carrasco, Félix, «*Lazarillo*: «(...) hablando con reverencia de Vuestra Merced, porque está ella delante» y la autoría de Alfonso de Valdés», *Ínsula*, 683 (noviembre 2003), pp. 14–17.
- Delicado, Francisco, *Retrato de la Lozana Andaluza*, Madrid, Cátedra, 2000 (tercera edición).
- García de la Concha, Víctor, *Nueva lectura del Lazarillo: el deleite de la perspectiva*, Madrid, Castalia, 1981.
- Goytisolo, Juan, «Alfonso de Valdés, “libre y claro”», *El País*, 26 de julio de 2003. <http://elpais.com/diario/2003/07/26/babelia/1059177013_850215.html>
- Ife, B. W., *Lectura y ficción en el Siglo de Oro: las razones de la picaresca*, Barcelona, Crítica, 1992.
- Lapesa, Rafael, «Personas gramaticales y tratamientos en español», en *Estudios de morfosintaxis histórica del español* (2 vols), Madrid, Gredos, 2000, pp. 311–345.
- La vida de Lazarillo de Tormes, y de sus fortunas y adversidades*, ed de Félix Carrasco, New York, Peter Lang, 1997.
- Lazarillo de Tormes: Medina del campo, 1554*, ed. de Jesús Cañas Murillo, Mérida, Junta de Extremadura, 1996.
- «Lázaro de Tormes», *Lazarillo de Tormes*, ed. de Francisco Rico, Madrid, Real Academia Española, 2011.
- Madrigal, José Luis, «Cervantes de Salazar, autor del *Lazarillo*», *Artífara*, II (enero-junio 2003). <<http://www.cisi.unito.it/artifara/rivista2/testi/cervlazar.asp>>
- Márquez Villanueva, Francisco, «El *Lazarillo* y sus autores», *Revista de Libros*, 90 (junio 2004), pp. 1–7. <<http://www.revistadelibros.com/articulos/el-lazarillo-y-sus-autores>>
- Navarro Durán, Rosa, *Alfonso de Valdés, autor del Lazarillo de Tormes*, Madrid, Gredos, 2004 (segunda edición).
- , *La verdad sobre el caso del Lazarillo de Tormes*, Navarra, Cénlit, 2010.
- , *Tres personajes satíricos en busca de su autor: Lázaro de Tormes, el atún Lázaro y Caronte en su diálogo con Pedro Luis Farnesio*, Valladolid, Universidad de Valladolid, 2011.
- Pérez Vénzala, Valentín, «El *Lazarillo* sigue siendo anónimo. En respuesta a su atribución a Alfonso de Valdés», *Espéculo*, XXVII (2004), pp. 1–18. <<https://pendientedemigracion.ucm.es/info/especulo/numero27/lazaril.html>>
- Ramírez López, Marco Antonio, «Fortuna y adversidades de la autoría del *Lazarillo de Tormes* y la postura de Rosa Navarro Durán», *Signos Literarios* 4 (julio-diciembre 2006), pp. 9–43.

- Rey Hazas, Antonio, 《Tras las huellas del autor del *Lazarillo*》, *Ínsula*, 778 (octubre 2011), pp. 16–18.
- Ricapito, Joseph V., 《Introducción》 a su ed. de *La vida de Lazarillo de Tormes y de sus fortunas y adversidades*, Madrid, Cátedra, 1980 (octava edición), pp. 11–85.
- Rico, Francisco, *La novela picaresca y el punto de vista*, Barcelona, Seix Barral, 1982 (tercera edición corregida y aumentada).
- , *Problemas del Lazarillo*, Madrid, Cátedra, 1988.
- Ruffinatto, Aldo, *Las dos caras del Lazarillo: texto y mensaje*, Madrid, Castalia, 2000.
- 《Lázaro González Pérez, actor y autor del *Lazarillo*》, *Ínsula*, 683 (noviembre 2003), pp. 11–13.
- San Pedro, Diego de, *Cárcer de amor*, ed. de Carmen Parrilla, Barcelona, Crítica, 1995.
- Valdés, Alfonso de, *Diálogo de las cosas acaecidas en Roma*, ed. de Rosa Navarro Durán, Madrid, Cátedra, 2012 (sexta edición).
- *La vida de Lazarillo de Tormes, y de sus fortunas y adversidades*, Introducción de Rosa Navarro Durán, ed. de Milagros Rodríguez Cáceres, Barcelona, Octaedro, 2006 (segunda y nueva edición).
- セルバンテス『ドン・キホーテ』前篇(三)(牛島信明訳)、岩波文庫、2006(第6刷)。
- 『ラサリーリヨ・デ・トルメスの生涯』(会田由訳)、岩波文庫、1990(第12刷)。
- 「ラサリーリヨ・デ・トルメスの生涯」(牛島信明訳)、『ピカレスク小説名作選』所収、国書刊行会、1997、7–107 ページ。